佳作賞受賞者

佳作賞
「ブラッディウェーブ」
『八月の群れ』57号

葉山ほずみ氏

葉山ほずみ（はやま・ほずみ）
一九七四年一月七日　姫路市生まれ　神戸市在住
二〇〇七年から四年半、NHK文化センター神戸教室「小説を書こう」に在籍。
二〇一二年から『八月の群れ』に所属。
International Federation of Aestheticians（国際エステティック連盟）所属の認定エステティシャン。二〇〇五年に同連盟のゴールドマスター賞受賞。

「ブラッディウェーブ」

ブラッディウェーブと名付けられた頭越えの強大な波が現れる南の島で、その波によって三年前に幼馴染の友樹を亡くした主人公ヒデは時間を止めたまま、毎日を過ごしていた。

いつものように、島に住み着いている川田と食事をしているところへ、観光客相手にガイドの仕事をしているイワンがリカという日本人の女を連れてくる。彼女はブラッディウェーブについて調べていた。彼女がヒデにブラッディウェーブについて問いかけたとき、頭に鋭い痛みと抑えられない苛立ちを感じる。ヒデにはその理由がわからなかった。

リカはヒデに、あの波には神判の波という別名がある、と伝える。その意味を調べようと川田に話を聞くうちに、自分の記憶の一部がすっぽりと抜けてしまっていることに気がつく。彼はそれに気がついても前に進めないままだった。

ある日の早朝、リカは川田が海岸で倒れているとヒデに助けを求める。二人が向かった先はブラッディウェーブが現れる海岸だった。川田を助けたあと、川田はリカにどうしてあの波に興味を持っているのかと問う。リカはあの波に乗ることが出来たら願いが叶うと聞いたと答える。そんな彼女に川田は「あの波は願いを叶えるのではなく、会いたい人に会える場所、夢殿だ」と話し、リカに波に乗らないよう説得した。

リカが波に乗ることを諦めたと安心して海岸を歩いていると、波がおかしいとサーファーが騒いでいる光景に出くわす。ヒデはブラッディウェーブがまた現れることに気が付き、リカへそれを告げた。リカはヒデに波に乗るのかと訊く。ヒデはサーフィンは止めたからと答えその場を独りで去った。

ヒデがブラッディウェーブに向き合えないままでいるところに、イワンから電話が入る。イワンは川田とブラッディウェーブが現れる海岸にいた。イワンと川田はヒデに、リカがヒデの代わりに波に乗ると言って海へ入ったと告げる。ヒデはその言葉に突き動かされるように海岸へ向かった。

リカに何かあったらと心配するイワンと川田を海岸に残し、リカを連れて帰ると三年ぶりに海へ入る。リカを見つけたヒデは彼女のそばで帰るよう説得する。イヤだというリカのまっすぐな視線に、ヒデは友樹の面影を見つける。そこでようやく自分がこの場所へ辿り着き、波に向き合うことが出来たのはリカやイワン、川田がいたからだと思えるようになった。

前哨戦の波を乗り越えたのはヒデ独りだけだった。ブラッディウェーブに対峙したヒデは波に呑まれ、気がつくと水平線ばかりの場所へ来ていた。

その場所で三年前のままの友樹に会ったヒデは記憶を失った理由を知る。まっすぐすぎたばかりに負けを認め、あっさりと波に連れて行かれた友樹を赦せなかったことを受け入れたヒデは記憶を受け取り、混濁していく意識の中、友樹と笑って別れた。

次に気がついた場所は砂浜の上だった。心配そうに覗き込む三人に、友樹と会えたことを話す。体中の痛みを生きている証しだと嬉しく思い、三人に支えられ、ブラッディウェーブの余韻を楽しんでいるサーファーたちの群れを抜け、歩き出した。